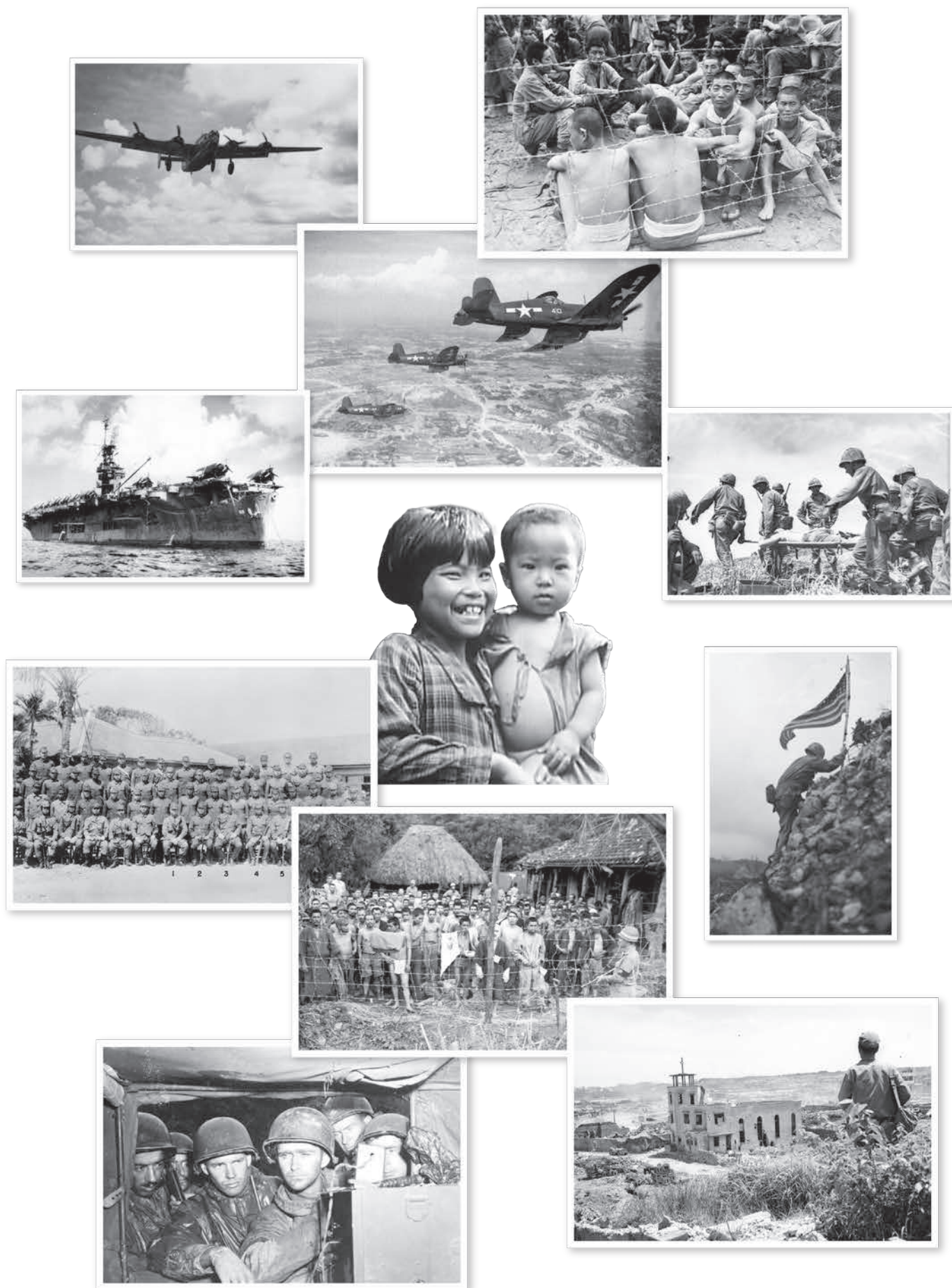




ドキュメンタリー

沖縄戦

知られざる悲しみの記憶



沖縄戦・体験者12人、専門家8人による証言

日本で唯一の地上戦が行われた沖縄。その凄惨な戦闘をほとんどの日本人が知ることなく、75年の年月が経とうとしている。本土への疎開のため多くの子供達が乗った対馬丸がアメリカの潜水艦によって撃沈され1482人が死亡。嘉数高地の戦いでは多くの日本兵、そしてアメリカ兵が戦死。陸軍司令部のあった首里城の攻防。さらには渡嘉敷島で起こった強制集団死。そして摩文仁の丘での牛島司令官の自決。だが、戦闘はそこで終わっていない…。

戦死者20万656人。県民だけを計算すると、当時の人口の3人に1人が死亡したことになる。

そんな戦闘はどのようにして始まったのか？ 住民が見つめたものとは何だったのか？

その歴史の記憶を克明に描く。沖縄戦体験者12人の証言と専門家8人による解説。

そして米軍が撮影した記録映像を駆使して紹介。

監督は原発事故の悲劇を描いた劇映画「朝日のあたる家」(山本太郎出演)で話題となった

太田隆文監督。原発事故に続き、今回は沖縄戦をドキュメンタリーで描く。

「米軍が最も恐れた男 その名は、カメジロー」「沖縄スパイ戦史」「主戦場」に続く、

戦争ドキュメンタリー作品の傑作。



『ドキュメンタリー沖縄戦』に込めた願い

——どこまでも青く美しい沖縄の空と海、

耳をつんざくような米軍機の爆音

今、ほんとうに平和なのだろうか？——

浄土真宗本願寺派(西本願寺)では、自他共に心豊かに生きることのできる社会の実現をめざし、現代の諸課題に対してさまざまな取り組みを進めております。総合研究所では、平和に関する取り組みの一環として、先の大戦で壮絶な地上戦が繰り広げられた沖縄戦の実態を伝え、国内外の多くの方々と共に、平和の大切さについて改めて考えていきたいという願いを込めて、映画の制作を企画いたしました。

アジア・太平洋戦争では多くの大切な命が失われました。今も戦争の痛みや悲しみ、苦しみを抱えている方が多くいらっしゃいます。しかし、戦争を知らない世代が増えた今、戦争の記憶が薄れつつあります。そのような中で大切なことは、「あの戦争とは何だったのか」「あの戦争では何が起こったのか」を知り、深く考え、その反省の上に立って、未来の世代に戦争の記憶をつないでいくことです。これは平和を希求する私たちの責務であり、そのためには戦争を体験され、悲しみや苦しみを抱えて生きてこられた方々のお話を聞くことから始めなければなりません。

先の大戦の末期、日本本土を防衛するために防波堤のようにされ、そして今でもなお戦争の記憶が克明に刻み込まれている地が沖縄です。現在は、一大リゾート地として観光や修学旅行などで訪れる方も多いと思いますが、75年ほど前に民間人を巻き込んで数多くの大切な命が奪われました。50年ほど前まではアメリカの施政権下におかれ、現在も日本全体の米軍基地の約7割が集中し、軍用機の耳をつんざくような爆音が日常生活の中に轟いています。沖縄戦の記憶を伝える戦跡は今も数多く残されて



います。私たちが「あの戦争とは何だったのか」「あの戦争では何が起こったのか」、そして何よりも、今、私たちが日々を暮らすこの地球社会は本当に平和なのだろうか？それを私たちに鋭く問いかけてくる現場が沖縄なのです。総合研究所では、2016年から沖縄戦についての調査研究を開始し、継続的に調査を行う中で、多くの沖縄の方々に会い、実際の戦争体験にもとづくお話をお聞きし、また各地の戦跡をご案内いただきました。恒久平和を願う沖縄の方々の惜しみないご協力を賜り、このたび「ドキュメンタリー沖縄戦」が完成いたしました。この映画には、当時の記録映像や沖縄戦を経験された方々の生の声が収められています。かけがえのない命が、ある場所では失われ、別の場所では生き残ったという不条理な現実が、多くの方の証言の中に描き出されています。

この映画を通して、国内外の多くの方々が、沖縄で何が起こったのかを知り、平和とは何かを考え、そして戦争の事実と記憶が広く子や孫の世代に受け継がれて、いつの日か、世界にまことの平和が実現することを切に願っています。

最後になりましたが、沖縄での調査・撮影にご協力をいただきました関係者の皆さま、また沖縄戦に関する情報をご提供いただきました関係各所の皆さまに、衷心より御礼申し上げます。



浄土真宗本願寺派(西本願寺)
総合研究所長 丘山願海

沖縄戦を全国に伝えたい。 歴史を知るだけでなく日本が見えてくる

監督：太田隆文

今回の取材まで沖縄戦について何も知らなかった。学校の日本史でも太平洋戦争に入る前に三学期が終わり。駆け足で授業が進んだりした。また、映画でも沖縄戦を題材にしたものは岡本喜八監督の「沖縄決戦」そして「ひめゆりの塔」そのリメイクが何本かしか存在しない。対して原爆が落とされた広島が舞台の映画やドラマは数多くあ



る。「はだしのゲン」という漫画が世代を超えて読まれている。長崎も同様。さらには世界の巨匠・黒澤明が「八月の狂想曲」という映画を作っている。なのに、沖縄戦に関して伝える作品は非常に限られている。

そのためか、沖縄というと「青い美しい海のある島」と「基地の町」という二極化したイメージしかなく、多くの日本人は「沖縄戦」を詳しく知らない。その1人が僕だった。6年前に原発事故の悲劇を描いた劇映画「朝日のあたる家」を



監督：太田隆文

1961年生まれ。「スターウォーズ」のジョージ・ルーカス監督らハリウッド監督の多くが学んだ南カルフォルニア大学(USC)映画科に学ぶ。帰国後、大林宣彦監督に師事。地方を舞台にした感動作を作り続ける。全作品が海外の映画祭で上映。2013年には原発事故を題材にした「朝日のあたる家」を監督。山本太郎が出演したことも話題になった。全国27館で公開。世界6カ国で上映された。最新作は沖縄戦を題材とした初の長編ドキュメンタリー作品。

「ストロベリーフィールズ」(2005年 佐津川愛美、谷村美月)「青い青い空」(2010年 波岡一喜、松坂慶子、長門裕之)
「朝日のあたる家」(2013年 並樹史朗、斉藤とも子、いしだ壱成、山本太郎)
「向日葵の丘 1983年夏」(2015年 常盤貴子、田中美里、藤田朋子、芳根京子)
「明日にける橋 1989年の想い出」(2017年 鈴木杏、板尾創路、田中美里、藤田朋子、宝田明)

撮ったことがきっかけで、依頼があったのが今回の「ドキュメンタリー沖縄戦 知られざる悲しみの記憶」だ。3年に渡る取材。多くの体験者、専門家のお話も聞かせてもらい、沖縄戦とはいかなるものであったかを痛感。それぞれの戦場があった場所にも訪れ、数々の資料館、祈念館も訪ねた。そこで知ったのは想像を絶する現実だった。

近年の映画では戦争はカッコよく、勇気ある戦いであるかのように描くものがある。が、本当の戦争＝日本で唯一の地上戦が行われた沖縄の現実を見ると、それらがいかにも嘘で固められ美化されたものであるがよく分かった。その意味でこの作品は「沖縄戦の歴史を知る」だけでなく、戦後の歴史、戦前の日本、さらには未来の日本が見えてくる。この作品を見ることで、そんなことを考える機会にして頂けたら幸いだ。そして何より取材に協力してくれた多くの沖縄の皆さんに感謝したい。この作品を全国に、そして世界に発信することで沖縄戦の叫びを伝えていきたい。



「人間は考える葦である」—フランスの思想家・パスカルの言葉より—

映画文筆業：永田よしのり

2011年に起きた東北地方太平洋沖地震による大災害。天災により約2万人の死者・行方不明者を出した。そしてさらに人災ともいえる福島第一原子力発電所の爆発事故。天災と人災、そのふたつを総称して東日本大震災と呼ぶ。

2013年、その福島原発事故により日常を突然破壊され



奪われた人々の悲しみを劇場用映画「朝日のあたる家」で描き、観客にさまざまなことを考えるきっかけを与えた太田隆文監督が、今回挑戦したのは第二次世界大戦末期の1945年に沖縄諸島に上陸した米・英軍と日本軍との間で行われた戦い(沖縄戦)で何があったのか、を現存する資料や映像、戦争体験者たちの声を基に綴ったドキュメンタリーだ。

太田監督のこれまでの劇場用映画作品は、そのどれもが家族や友人たちの交流、否応なく流れていく時流の中で翻弄されながらも人にとって大切なこととは何なのか、を描いていく人間ドラマ。そのドラマの中で我々は登場人物たちに自分たちを重ね、思いでや喜び、後悔などを蘇らせながら「またやってくる明日」に向かう勇気を与えられてきた。

そこには作品に込められた監督の思いが、我々に重ねられ届いた瞬間があり、映画というカタチでのエールもあったゆえのものだと考えている。

そうした「明日」への力を与えてくれる太田作品が、第二次大戦下で行われた沖縄戦を1本の作品にする。そこにはどんな力があるのか。大きな期待と不安があった。

なぜなら作家の思いを直接描き込むフィクション・ドラマとは違い、実際に起きた現実のみを綴るノンフィクション・ドキュメンタリーに作家性が投影されるのだろうか、と。

これまでも無数のドキュメンタリー映画は製作・公開されてきた。ネイチャー、映画製作の舞台裏、政治、祭り、犯罪、闘病、もちろん戦争を題材にしたものも含め様々なジャンルがある。だが時に思うのはドキュメンタリーとしていながら、そこに「製作者たちの思い」が過剰に盛り込まれる場合があり、さらには「編集のやり方」次第でノンフィクションがあたかもフィクション化してしまうこともあることだ。

それは実際に起きた事象だけを写し撮るだけではなく、作品中で付加して語ることで、観客をある思惑に誘導してしまうきらいもある。つまり、ただそこで起きたことを観客に伝えるだけではなく「我々はこう考えているが、あなたたちはどう考えますか?」という主張だ。

誤解をしてほしくないがそこにある種の「洗脳」が存在してしまう。つまりドキュメンタリーとしながら、そこには編集による情報操作の一端も存在してしまうのだ。製作サイドの思いが強ければ強いほどそうした嫌いはあろう。

それを一番危惧していた。

しかし、「ドキュメンタリー沖縄戦 知られざる悲しみの記憶」には、そうした曖昧なそして片寄った主張は一切ない。

ただただ現存する事実のみを写し撮り、沖縄戦体験者たちが体験したことのみを語り、幾多の死体を見せ、当時の日本軍部の有り様を淡々と我々に説明していく。

そこに虚飾はない。

唯一ナレーションとして戦争体験者でもあり、現在も戦争をしない世界を目指し活動が続けている俳優・宝田明の声が映像に重なっていくが、その宝田明の声は「戦争体験者ゆえの生の声」として使用されているのに他ならない。

それゆえ、我々は本作品の上映時間約105分に、当時の沖縄にいるかのような体験をすることになる。



沖縄戦で何があったのか?

現地の人々はどんな体験をしたのか?

当時の日本の立ち位置、日本軍の考え方とは?

沖縄の人々は当時何を考え、その戦争に立ち会ったのか?

我々はただそれを観る。

そして過去の沖縄戦について思う。

だがそれだけではなからう。

人は生まれ、いつかは死ぬ。

それは絶対的に動かせない事実。

その思いは沖縄戦を知った怒りから派生するものでも、悲しみから派生するものでも、自分の無知から派生するものでもいい。

考えることは人間の知的欲求であり、生きるためのエネルギーのひとつでもある。

我々は何のために生まれ、何をして生き、何のために死に、何をして死ぬべきなのか?

我々が次の世代に残すべきものは何なのか?

そこに気づかせ、考えさせることこそが、太田隆文という映画監督の作家性なのだ。

ナレーション



宝田 明

1934年4月29日生まれ。旧満州ハルビン出身。
1954年第6期東宝ニューフェイスとして「かくて自由の鐘は鳴る」でデビュー。「ゴジラ」「青い山脈」「放浪記」など、映画出演は200本を超える。「あげまん」「ミンボーの女」「マルタイの女」などの伊丹十三作品にも出演。1964年『アニー・よ銃をとれ』でブロードウェイミュージカルに挑戦し、芸術祭奨励賞を受賞。以後『サウンド・オブ・ミュージック』『風と共に去りぬ』『マイ・フェア・レディ』など数多くの主演をこなし、第6回紀伊国屋演劇賞、第10回ゴールデンアロー賞を受賞。2012年には自身の製作・演出・出演によるミュージカル『ファンタスティックス』を全国公演し、平成24年度文化庁芸術祭大賞を受賞。日本を代表するミュージカル俳優として不動の地位を築く。近年では全国各地で講演活動も積極的に行っており、1945年にソ連軍が侵攻してきた満州での悲惨な少年時代の体験を元に平和の尊さを説いている。2016年5月に『戦後70年日本映画平和賞』を受賞している。太田監督作品では「明日にける橋」に参加。



斉藤とも子

神戸出身。1976年、NHK少年ドラマ「明日への追跡」でデビュー。
主な作品：TV「青春ド真ん中」「ゆうひが丘の総理大臣」「男たちの旅路・車輪の一步」NHK「若い広場～マイブックコーナー」聞き手、NHKドラマ「浮世の画家」、「春子の人形」など。映画「ひめゆりの塔」「朝日のあたる家」今年10月公開の「一粒の麦」他多数。舞台「娘よ」「父と暮せば」「かもめ来ころ」「痕跡」(2014年鶴屋南北賞受賞)「静かな海」「骨ノ憂鬱」など。1999年、井上ひさし作「父と暮せば」の縁で被爆者と出会い。著書『きこの雲の下から、明日へ』(2005年・ゆいぽおと)は日本ジャーナリスト会議(JCJ)市民メディア賞、平和・協同ジャーナリスト基金奨励賞を受賞。2003年社会福祉士取得。神戸親和女子大客員教授
太田監督作品では「朝日のあたる家」「向日葵の丘」に参加。

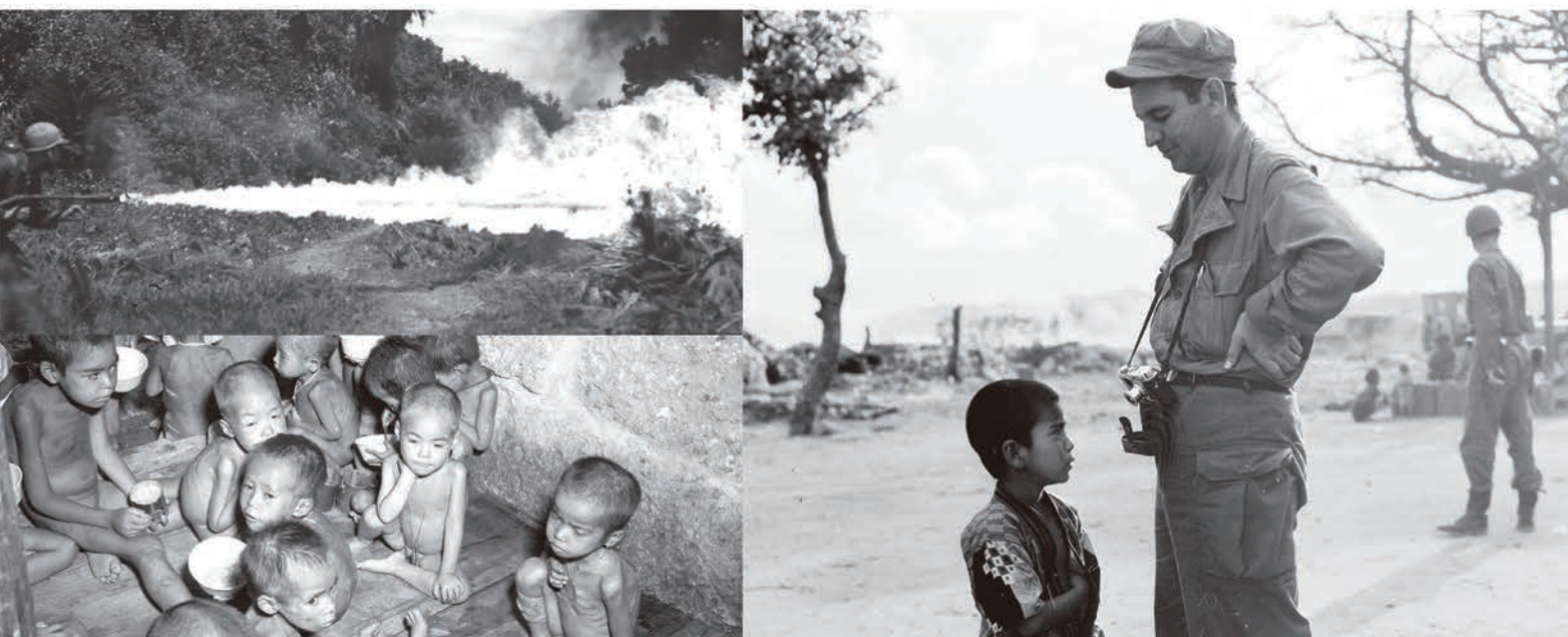
声の出演 羽野幸朋 嵯峨崇司 水津亜子

題字



大石千世

静岡県出身。静岡大卒。書家
独立書人団評議員・審査会員、毎日書道会評議員・審査会員、千世の会主宰。元東京芸術大学・美術学部講師。海外展出展多数。静岡県文化奨励賞受賞、第2回日本書道大賞新人賞受賞。数々の賞を受賞し、国内外を問わず活躍する。シカゴ美術館、プラハ美術館等に作品収蔵。書壇での評価も高く女流書家として書道界を牽引している。太田監督の「青い青い空」で松阪慶子の書道指導をしたことがきっかけで「向日葵の丘 1983年夏」「明日にける橋 1989年の想い出」そして今回の「ドキュメンタリー沖縄戦 知られざる悲しみの記憶」も担当。



沖縄戦体験者



知花治雄

米軍と交渉、シムクガマに隠れた
住人を救った比嘉平三が祖父



上原美智子

当時、小学校3年、当時9歳。
戦争体験を伝える活動を続けている。



座間味昌茂

元・渡嘉敷島村長(当時5歳)



平良啓子

当時9歳、米潜水艦に撃沈された対馬丸に乗船。
九死に一生を得た。



吉川嘉勝

当時、小学校1年生。渡嘉敷島出身。
強制集団死生存者。



瑞慶覧長方

当時13歳、元・沖縄県議会議員

松田敬子 比嘉キヨ 島袋安子 山内フジ 真栄田悦子 長浜ヨシ

専門家



照屋 勉

与那原町町長



上江洲安昌

与那原町議会 議員



川満 彰

陸軍中野学校と沖縄戦：
知られざる少年兵「護郷隊」著者



佐喜眞道夫

佐喜眞美術館館長



吉浜 忍

元・沖縄国際大学教授



平良次子

南風原文化センター学芸員



知花昌一

元・読谷村議会議員



大城貴代子

沖縄県女性団体連絡協議会
会長

沖縄戦の図解



対馬丸記念館

那覇市若狭1-25-37

撃沈された対馬丸の資料を展示。当時の教育も紹介。



平和祈念公園

糸満市字摩文仁444番地

摩文仁の丘の上には国立沖縄戦没者墓苑や府県、団体の慰霊塔が50基建立。



南風原文化センター

島尻郡南風原町字喜屋武257番地

沖縄に関する歴史資料や沖縄戦に関する展示。奉安殿、等。



シュガーローフ(安里52高地)

那覇市おもろまち1丁目6

独立混成第44旅団配下部隊が米第6海兵師団と激戦を繰り広げた。



糸数壕(アプチラガマ)

南城市玉城糸数667

南風原陸軍病院の分室となり600人以上の負傷兵で埋め尽くされた。



嘉数高台公園

宜野湾市嘉数1丁目5

日米ともに多数の犠牲を出した嘉数高地の戦いがあった場所。ここからは普天間基地のオスプレイが見える。



首里城

那覇市首里当蔵町3丁目1

戦中の米軍の攻撃で焼失したが、戦後に再建。しかし、本年2019年の火災で再び焼失。



那覇

米軍の爆撃により見渡す限りの瓦礫と化した。



陸軍司令部壕(首里城)

那覇市首里真和志町1丁目

司令部壕は首里城地下30m、南北に渡る坑道を主に千数百メートルほどあった。



海軍司令部壕

豊見城市字豊見城236番地

大日本帝国海軍の司令部として使用された防空壕。見学可。



軽便与那原駅舎

島尻郡与那原町字与那原 与那原3148-1

当時の駅舎を再現。情景や出来事を写した貴重な写真、路線図や年表といった大型パネルを展示。



集団自決跡地

島尻郡渡嘉敷村字渡嘉敷

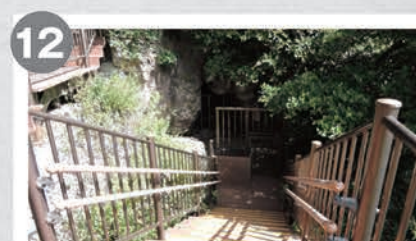
軍の指示により島民が集結。自決を求められた。現在は強制集団死と呼ばれる。



佐喜眞美術館

宜野湾市字上原358

一部返還された普天間飛行場の用地に開館。丸木夫妻による「沖縄戦の図」の常設展示。



第32軍司令部 摩文仁壕

沖縄県糸満市字摩文仁

首里陥落後、この壕へ撤退したが、米軍に追い詰められ牛島満軍司令官と長勇参謀長はここで自決。



渡久地ビーチ(米軍上陸の地)

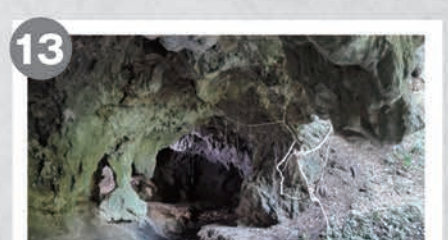
中頭郡読谷村字渡具知228

1945年4月1日に米軍が上陸した場所。



チビチリガマ

中頭郡読谷村字波平1153



シムクガマ

中頭郡読谷村字波平438



嘉手納基地

当時は日本軍の中飛行場。上陸作戦初日に占領された。





沖縄戦ヒストリー

1944(昭和19)年

7月7日 サイパン島陥落。絶対防衛圏の崩壊。

8月22日 疎開船・対馬丸、米軍潜水艦の攻撃を受け轟沈する。犠牲者1484名

10月10日 南西諸島空襲

10月20日 米軍、レイテ島に上陸

12月3日 第32軍、司令部を首里に変更

1945年(昭和20)年

1月22日 米軍、南西諸島を空襲

3月1日 米軍、南西諸島を空襲

3月26日 米軍、座間味島に上陸

3月27日 米軍、渡嘉敷島に上陸

3月28日 米軍、沖縄本島に空襲、艦砲射撃
渡嘉敷島で強制集団死が起こる

4月1日 米軍、沖縄本島読谷・北谷海岸に上陸

2日 宮崎周一大本営第一部長「結局、沖縄は米軍に占領され、本土来寇(らいこう)は必至」と述べる。

3日 米軍、本島を南北に分断。(日本軍や住民が逃げられなくするため)

5日 米軍戦車隊、宜野湾に侵入

7日 戦艦大和、撃沈される。

10日 嘉数高地の戦闘

13日 米軍、本島北端の辺戸岬に進出

16日 米軍、伊江島上陸

24日 米軍、嘉数高地から日本軍撤退を確認

26日 浦添、西原で激戦

5月4日 日本軍、総攻撃に失敗。兵力の3分の2を失う。

13日 シュガーローフヒル(現在の新都心)の戦闘始まる。

22日 日本軍、首里を放棄し南部撤退を決定

31日 米軍、首里を占領

6月4日 米軍、小禄半島に上陸

10日 米軍バックナー司令官、牛島満司令官あてに降伏勧告

11日 米軍、豊見城の海軍司令壕を包囲

13日 大田実海軍司令官自決

19日 バックナー司令官、糸満の真栄里で戦死。牛島司令、以下の指示を出す。「爾今(じこん)各部隊は各局地における生存者中の上級者之を指揮し最後迄敢闘し悠久の大義に生くべし」(各局地で最上の階級の者が指揮して最後まで戦え)
22日 米軍、全面的な掃討戦を開始。モップアップ作戦やジャップハンティング作戦と呼ばれた。このころ、南部方面には住民10万人、日本兵3万人が追い詰められた。

23日 牛島満司令官・長勇参謀長自決(22日の説あり)(第32軍の組織的戦闘終わる)

7月2日 米軍、沖縄作戦終了を宣言

8月9日 長崎に原爆投下したB29が読谷飛行場に飛来し給油。テニアンへ帰還。(広島への投下の次は北九州の小倉だったが、悪天候や八幡空襲後の煙幕のため目視できず、長崎に変更された)

8月15日 日本が降伏

9月2日 米艦ミズーリ号で降伏調印式

9月7日 米軍第十軍司令部で降伏調印式
(戦闘としての沖縄戦は終わったが、島々や本島の民間人収容施設では飢えとマラリアによる被害は続いていた。また多くの住民が郷里に帰ることができないままだった)

対馬丸の証言、集団自決の生存者の方の証言など…
忘れてはいけないことを忘れてはいけない、
と改めて思われました。

(映画「おかあさんの被爆ピアノ」監督 五藤利弘さん)

沖縄の民間人を巻き込み沢山の方々を
自殺に追い込み、戦闘では沢山の兵隊を亡くしました。
本土決戦を控えて沖縄を犠牲にし、
時間を稼ぐ日本政府の考え方、悲し過ぎます。

(漫画家 御茶漬海苔さん)

戦争がもたらす多くの「なぜ？」への答えは、
まず戦争の真実を知ること以外からは得られまい。
その意味で本作品は私たちへの
切実な問題提起であり、
静かで力強い反戦メッセージである

(50代 元高校教師)

この映画は明らかに違う。
悲壮感を突き抜けた何かによって、
私たちの身体に「戦争」が染み込んでくるのだ。
このような戦争の伝え方があったのか！
そう思わずにはいられない
必見のドキュメンタリー映画である。

(和歌山信愛女子短大・教授 伊藤宏さん)

その抑えた口調に重い事実を
引き受けて生きざるをえなかった人の悔いや憤り、
哀しさなどが入り混じった複雑な思いがにじむ。
戦争は現実検討能力を奪い、
認知行動にゆがみをもたらす。

(文芸批評家 佐藤清文さん)

やはり当事者の口から語られると胸に迫る。
あの日沖縄で起きたことを語り継がなければならない。
当事者が高齢化した今、誰もが戦争の実態を
想像しづらくなっている今だからこそ、
この映画が作られた意義がある。

(脚本家 伴一彦さん)

命(ぬち)どう宝を笑う日本人が増えている。
命より大切なものがあると。それは国家であり。
その向こうの天皇だ。辺野古の訴えも、
この映画が訴えるものも無視して、日本は進んでいる。
沖縄を本土と認めず戦わせ、死なせ、
基地を押し付け、忘れ去る。
本当にそれで良いのか、日本人。

(脚本家 我妻正義さん)

結局生き延びる可能性があった方々の生き延びる道が
閉ざされた原因は教育だった。個の気持ちの
持ち方が大切であると再び思われた。

(40代 女性)

